

論文の内容の要旨

論文題名

Prescription pattern analysis for antibiotics in working-age workers diagnosed with common cold

(我が国における感冒と診断された勤労者に対する抗菌薬の処方パターンについて)

掲載雑誌名

Scientific Reports.

Vol.11 No.1 doi: 10.1038/s41598-021-02204-3. 2021年掲載

薬学研究科 薬学専攻(病院薬剤学) 博士課程 荒木 康弘

内容要旨

【背景・目的】微生物の薬物耐性の主因の一つは抗菌薬の不適切な使用にあり、とりわけ上気道感染症に対する抗菌薬処方は、有効性が確立されていないにもかかわらず広く使用されている。一方、我が国における感冒症状への抗菌薬の処方実態は必ずしも十分ではないため、ビッグデータを用いた処方実態を調査した。

【方法】(株)JMDC保有の社会保険加入者約360万人のデータから、2005年1月～2016年2月までに5年間以上連続で健康診断を受診している被保険者から、感冒の診断を受けた同月に、調剤薬局で薬の処方を受けた18,659名を対象に、抗菌薬が処方された割合を算出するとともに、多変量ロジスティック回帰分析を行い、抗菌薬が処方される患者の予測因子を調査した。

【結果】解析対象者のうち、抗菌薬を処方された者は49.1%、されなかった者は50.8%であった。抗菌薬を処方される要因として、男性、年齢が若いこと、ベッド数20未満の小規模な医療機関の受診者、慢性下気道疾患を有する患者、基礎疾患(高血圧、高コレステロール血症、糖尿病等)を持たない者が抽出された。

【考察】本研究では、健康で若い男性の勤労者が感冒症状を感じた際に、抗菌薬を処方する小規模医療機関を受診している可能性があることが示された。今般の分析は、今後我が国での抗菌薬の使用削減を行う際、対策を検討する一助になると考えられる。